

NHKの受信料判決 情報系、報道系の殻を破り オリジナルを突き詰めてはどうか?

山田健太

放送法が求める 放送番組種別の公表とは

今回はピンチヒッターなので、いつもとはちょっと違った視点で。「報道」番組とひと口で言っても、とりわけ民放の場合、その幅は相当に広い。放送法はご丁寧にも、各局に「放送番組の種別」を公表するように求めているが、この自主公表資料によると、放送各局は実に多くの報道番組を放送していることになる(なお、この公表制度自体は通販番組の総量規制を企図して、嫌がる放送界を無理やりねじ伏せて導入されたものであるが、実質的な意味が如何ほどのものか、筆者には理解できない)。

例えば最新公表データである2016年下期の放送時間を見ると、NHKが総時間168時間中、多い週で90時間近くが報道番組であることはまだ想像に難くないが、民放でも総じて40時間程度は番組種別でいうところの「報道」番組を放送していることになっている。ちなみに、民放の場合はNHKとほぼ同じ総放送時間のうち、約6分の1はCMであるし、便宜上番組換算の通信販売を除けば、実に番組の4分の1が報道ということになる(ちなみに一番比率が高いのは「娯楽」である)。

だからこそ、というべきなのか、民放各局が自ら「報道」に色分けする番組は千差万別だ。それはまさに、日本のテレビ局の多様性なり番組制作能力の高さ

というべきなのかもしれないが、こうした「なんでもホードー」状態が、報道の一線を危うくしている面があることに、放送人自らが常に自覚を持つことが必要だ。具体的に言えば、ストレートニュース系の番組から、報道系あるいはニュースショーとして親しまれている当欄の主たる検証対象でもある夜時間帯の番組を除き、おおよそ朝から夕方までは、ほぼすべて「報道」系番組というのが実態であるからだ(なお唯一テレビ東京は、「報道+娯楽」といった相乗り系番組がほとんどない番組編成である)。

さしあたりTBSテレビなら「はやドキ!」「あさちゃん!」「ピピット」「ひるおび!」「勇気のシルシ」「テッペン!」「ゴゴスマ」「教えてもらう前と後」「新・情報7days」「S☆1」「サンデーモーニング」「サンデー・ジャポン」「アッコにおまかせ!」はみな、報道番組ということになる。テレビ朝日の場合は「グッド!モーニング」「モーニングショー」「ワイド!スクランブル」「スーパーJチャンネル」「サタデーステーション」「サンデーLIVE!!」「サンデーステーション」である。同様に日本テレビは「ZIP!」「スッキリ」「PON!」「ヒルナンデス!」「ミヤネ屋」「news every.」「ズームイン!!サタデー」「ウェークアップ!ぶらす」であるし、フジテレビなら「めざましテレビ」「とくダネ!」「ノンストップ!」「バイキング」「グッディ!」「にじいろジーン」「ワイドナショー」「ザ・ノンフィクション」「Mr.サンデー」ということになる

(一部、番組名を省略している)。

予定調和や付度ばかりで テレビ総体のパワーが落ちる

世の中には、いろいろと“大人の事情”が存在しており、それは当然メディアの世界にもある。例えば、スポンサー企業の商品を当該ドラマ内で使用するのは、そうした事情を超えた商慣習であり、さらに言えば黙示的な契約の類いとも言えるだろう。同様にタレント事務所や広告会社に気を遣うのも、あつてしかるべきではあつて、意図的な無視や不格好な加工は見苦しくはあるものの、その一つひとつに目くらまを立てたり、「タブー」と言いはやしたりすることは、まさに「大人げない」所作でもある。

その延長線上として、さまざまな権利関係などビジネス上のお付き合いも多いスポーツ関係団体とも、それなりに扱い方に制約はあるもので、現場が勝手に番組が作れるほど世の中は甘くない。一方の報道現場においても、違った意味での“大人の事情”があつて、例えば政治家や財界人との「(形ばかりの)信頼」関係のなかで、あえて記事にしないこともあるだろう。

そしてこれまではあえていえば、情報系のやんちゃや性やいい意味でのいい加減さと、報道系の慎重・堅実さが、お互いの長所短所を補い合つて、多様で総合的な「報道」系番組を形作るものと考えられてきたのではない。しかし今日、むしろその短所ばかりが掛け合わされる形で、右にも左にも「付度」するような状況が生まれ、上つ面で事を済ますような状況が続いているとして、批判が絶えない事態に陥っている。政界の「情報隠し」しかり、自らを安全地帯において、予定調和の批判をいうことで、視聴者の一定層の憂さ晴らしの捌け口になるだけでは、テレビ総体のパワーは落ちるばかりで心配だ。

ジャーナリズムの原点を 現場に問い続ける

ちょうど2017年12月初頭には、表現の自由事案では四半世紀ぶりの最高裁大法廷判決があつた。NHK受信料制度の正当性をめぐる裁判で、民放においても他人事ではない司法判断であつた。もちろん、当日の夜のニュースでは、いずれも一定の時間を割い



NHKの受信料未払い裁判について報じたテレビ東京[WBS]



「NHKには公正中立な放送が求められていることになる」と指摘した「報道ステーション」(テレビ朝日)

て伝える努力をしていた。しかし残念ながら、未払い者への浸透度合い(テレビ東京)や、NHKに求める公共性として不偏不党に言及すること(テレビ朝日)が、「NHK問題」の枠にとどまってしまう、日本の放送全体の「公共性」の問題であるとの認識は感じられないままだった。

もちろん、このストレートニュースにそこまで求めることはないものねだりであるとは思いつつ、ちょうど11月末に亡くなったジャーナリズム界の道標であつた故・原寿雄氏を思うと、彼が繰り返した、映像至上主義・感性主義への危険性、不偏不党より多様性原則重視、そして国益報道との決別、といったジャーナリズムの原点を、しつこく現場に問い続けることが必要だと痛感する。

そうであるならば、形式的な変更では何も変わらないという批判は承知のうえ、それでも一度、情報系番組は「報道」の衣を脱ぎ捨て、報道系番組は「教養・娯楽」の殻を破って、もっと自由にさらに純粋に、自らのオリジナルの道を突き進むことに徹してみてもうだろうか。